

ラスト・バースデー

竹村直久

登場人物

有川新吉郎（70） アリカワ製菓会長。
淳子（35） 新吉郎の長女。
芳子（32） 同 次女・医者。
玲子（26） 同 三女。
元村 隆夫（39） 淳子の夫・アリカワ製菓社長。
武崎 啓一（31） 玲子のフィアンセ。
太田 幸太（28） 新吉郎の愛人の息子。

まだ明かりが入らない真っ暗な舞台にナレーションが流れる。

N

「西暦200X年。日本に安楽死法が制定された。それは癌などの末期的症状を呈する患者が、無駄な延命治療をせずに残された時間を有意義に過ごし、本人の意思で安楽死を望むのであれば、それを容認すると言う法律である。この物語は、この法律が施行されてから数年が経ち、回復の見込みが無いと診断された患者が安楽死を選択することが日常化した社会での、ある老人の人生最後の日の出来事である」

暗闇の中から耳を覆いたくなる様な新吉郎の呻き声が響いてくる。

新吉郎の声「ううう……つつつ……ううううう……痛い……

・痛いよう……芳子……芳子お……助けてくれえ……」

明かりが入る。

舞台は有川新吉郎の別荘の一室である。

上手に5〜6人が座れるくらいの大きさのテーブルと椅子がある。

中央下手寄りに背もたれが起きる病人用のベッドがある。

ベッドの脇に点滴液を吊るしたスタンドが立っている。

その脇にボックス状のガラスケースがあり、注射器や薬剤等、様々な医療器具が入っている。

上手の壁に玄関に通ずるドアがある。

舞台奥やや上手よりキッチンに通ずるドアがある。

病人用のベッドに、腕に点滴を刺されて寝ている有川新吉郎（70）がいる。浴衣を着て、顔はゲツソリとやつれている。

キッチンのドアから白衣を着た芳子（32）が入ってきて来る。

芳子「お父さん」

新吉郎「ううう・・・苦しい、痛い・・・痛いよ・・・芳子・・・

芳子・・・うう・・・助けてくれえ・・・」

芳子はガラスケースからテキパキと薬瓶を選んで注射器に薬液を注入し、新吉郎の腕に刺された点滴の管に注射器を繋ぐ。

芳子「大丈夫だよ・・・少し我慢して、すぐ薬効いてくるからね

・・・」

と注射器のピストンを押していく。

新吉郎「今日はみんな、来てくれるかなあ・・・」

芳子「大丈夫だよ、皆にちゃんと連絡したから」

新吉郎「そうか・・・皆来てくれるといいな・・・このまま誰も来てくれないまま死ぬのはいやだよ・・・」

芳子「そんなこと私がさせないから・・・安心して」

新吉郎「うん・・・今日は皆、楽しく過ごしてくれるといいな・・・」

芳子「・・・そうだね・・・（微笑む）」

ふいに顔をしかめて嗚咽を漏らす芳子、口を抑えて「いらせる。」

薬が効いてきたのか、しぼんでいた風船が膨らんで

いく様に元気が出て来る新吉郎。

新吉郎「ふっ・・・ふうう・・・芳子・・・お前は神様だ・・・」

芳子「（笑い）なに言ってるんだか・・・」

新吉郎「（目を瞬かせ）うっ・・・おっ・・・ううう・・・ふうう・・・ありがとう、楽になった・・・こんなに効いたのは始めてだな、この薬は今までのと違うのか？」

芳子「今日は最後だからね、特別にしたの」

新吉郎「そうか・・・ふふ、もう副作用もクソもねえからな、いっぱい打ってくれたんだなあ・・・ああ、いい気分だ、ありがとう」

芳子「・・・」

新吉郎「しかし悪かったなあ芳子、俺がここで死にたいなんて言っただけなのに、お前に長いこと病院休ませることになっちゃって・・・もうまる二年か、あのまま大学病院にいれば良かったのって思ってるだろう」

芳子「そんなことないよ」

新吉郎「あそこにいれば面倒な引越もしなくてすんだのに、病院だってお前が側にいてくれることに変わりはないんだから・・・」

芳子「いいの、私もそうしたかったから、母さんの時だって家に帰って死ねて良かったって喜んでたじゃない」

新吉郎「そうだな・・・しかし今度もお前ひとりに世話をかけてしまったな」

芳子「やめてよ、私は医者なんだから当たり前でしょ」

新吉郎「うん・・・俺は娘が医者で運が良かった」

芳子「父さんが高い学校出してくれたからじゃない」

大きく手を上げ伸びをする新吉郎。

新吉郎「あっ・・・あっ・・・あああ・・・やっと目が覚めてきたア・・・おおお、良い気分だあ、すっかり嘘みたいにな

元村はキチツとした背広を着ている。片手にアタッシューケースを提げ、もう片方の手には大きなデコレーションシヨウケーキの箱を持っている。

淳子もフォーマルなものでちだが元村程には堅苦しくない感じ。上着の下にレトロな感じのブラウスを着ている。手には花束を持っている。体操している新吉郎を見て驚く。

淳子「お父さん！」

元村「しゃ、社長っ！」

止まる新吉郎。

淳子と元村を見つめる。

新吉郎「・・・はて、どちら様でしたかな？」

淳子「！」

元村「しゃ・・・社長・・・」

新吉郎「・・・だあゝっはははは冗談冗談、よく来たなあお前等、よっ、淳子久しぶり」

淳子「（怒って）そう言う冗談は二度としないでよお父さん」

新吉郎「わっははは悪い悪い」

と体操を続ける。

淳子「何やってるのよ」

新吉郎「体操だよ」

元村「治ったんですか社長！」

新吉郎「バアカー治るワケないだろ、末期癌だぞ身体中に転移してんだぞ、芳子が打ってくれた特效薬のお陰だよ」

芳子の顔を見る元村。

芳子「モルヒネですよ」

淳子「だからっていくらなんでもそんな起き上がっちゃダメでしょう」

芳子「言っても聞かないのよ」

新吉郎「ああ・分かってるって」

とベッドに乗る。

元村「社長・・社長（涙目）」

新吉郎「バアカーやめろやめろ、今日は辛気臭いのは御法度だぞ」

元村「はい・しかし社長・・」

新吉郎「もう社長じゃねえって、今は社長はお前だろう」

元村「はい」

新吉郎「あっ、おい、例のモノ持って来たか」

元村「はい」

とアタッシュケースの中から大きなハリセンを出して新吉郎に渡す。

新吉郎「おおくそうそうコレコレ」

とヒュンヒュン振り回して感触を確かめる。

芳子「（見て）あっ、コラッ」

新吉郎「前のヤツは芳子を取り上げて捨てちゃったんだよ（嬉しそう）」

芳子「元村さん！なんでそんなモノ持って来たのよお」

元村「（汗を拭き）はあ・すいません。こんなモノでもあれ

ば、社長も少しは元気になってくれるかと思ひまして・・」

新吉郎「バカモン！（とハリセンで元村の頭をひっぱたく）」

頭を抑える元村。

新吉郎 「なんでお前が謝るんだ。お前は俺が持って来いと言ったから持って来ただけじゃないか」

元村 「はい・・・」

新吉郎 「社長足る者そう簡単に人に侘びを入れてはいかん！ 分かったか！」

とまたバシッとひっぱたく。

腕で目を覆う元村。

新吉郎 「どうした、もう泣いたのか」

元村 「いえ・・・何か元気な頃の社長が、戻って来たようで・・・お懐かしゅうございます・・・」

新吉郎 「泣くんじやないアホがあ！（とまたひっぱたく）今日は

涙は御法度だと言っとるだろうが」

芳子 「お父さん！」

新吉郎 「（ハリセンを隠し）いや、いいじゃんコレは、せつかく元村が持って来てくれたんだし・・・」

芳子 「（睨んでいる）」

新吉郎 「（元村に）それで、売り上げの方はどうなってる、なんだかいつも変わり映えしない業務報告ばかりだが」

元村 「はい、万事滞りなく、操業いたしておりますので、どうぞ心配なく」

新吉郎 「そうか・・・うん、まあお前がいてくれるお陰で俺も安心して死ねると言うもんだ。いやあサンキュサンキュ」

元村 「社長、そんなことおっしゃらないで下さい・・・」

新吉郎 「元村、会社のことは、後を頼んだぞ」

元村 「はい」

新吉郎 「しっかりやれよ、後は淳子とお前が仲良くやってくれれば言うことではないんだ（と淳子を見る）」

ソッポを向く淳子。

新吉郎「(元村に) 俊弘は元気にしてるか」

元村「はい・・・またおじいちゃんと遊びたいって、言ってきました」

新吉郎「・・・そうか、いつか俺のことはお前からよく話してやってくれ」

元村「はい・・・」

新吉郎「もう俊弘の成長が見られなくなるのは残念だが、淳子といつまでも幸せにな」

と淳子を見る。

プイツと横を向いてしまう淳子。

新吉郎「なんだ・・・あいつはまだムクれてんのか」

淳子「すいませんねムクれてて」

元村「はあ・・・全くもって、自分の不甲斐なさを痛感しております。本当に申し訳ありません・・・」

新吉郎「(ひっばたく) だから謝るなって言うてるに!!」

芳子「やめなさいよお父さん!」

とハリセンを取り上げようとする。

サツとハリセンを後に隠す新吉郎。

側に来て花束を新吉郎に差し出す淳子。

淳子「(怒り口調で) ハイお父さん、お誕生日おめでとう」

新吉郎「(受け取り) ありがとう・・・と言いたるところだが、なんだこんな高そうな花束、もったいない」

淳子「・・・」

新吉郎「これから死のうって人間に花なんかくれたって無意味だぞ」

芳子と顔を見合わせる淳子。

淳子「あっそう、それじゃいいわよ、父さんになんかあげないから」

と花束を取り返す。

淳子「タカちゃんどっかに活けといてよ」

と元村に渡す。

元村「ああ（と受け取る）」

芳子「あ、花瓶はあっちの台所にありますから」

元村は花束を持ってキッチンへ通じるドアに入って

行く。

淳子「はあ、それにしても殺風景な病室ねえ・・・まあお父さんらしいわ」

芳子「でしょう（と顔を見合わせる）・・・あ」

と淳子の着ているブラウスを見て。

芳子「これ・・・お母さんの」

淳子「そう、驚きでしょう。まだ全然綺麗だしほつれてもいないんだよ、母さんよっぽど大事に着てたのね」

芳子「そっか、今日は母さんにも迎えに来て貰わなきゃだもんね」

淳子「そーそー」

芳子「（悲しげに微笑む）」

淳子「それより芳子」

芳子「？」

淳子「この前ね、家の事務所にヘンなファックスが来てたんだけど」

芳子「え」

淳子「なんか悪い悪戯だと思っただけど、アンタが病院の外科の先生と不倫してる悪い女だって・・・」

芳子「ああ・・・アレ」

淳子「ホントなの？」

芳子「気にしないでよ、そういうのよくあるから」

淳子「よくあるって、大丈夫なの？」

芳子「出世の足の引っ張り合いだから・・・」

淳子「そう・・・（不信顔）だけど・・・」

玲子の声「こんにちはあゝ」

上手を見る淳子と芳子。

上手のドアから玲子（26）が入って来る。玲子は

結婚式の二次会からそのまま来た様な艶やかな出で立ちである。

淳子「玲子」

玲子「お久し振りいゝ」

芳子「玲子、元気にしたのアンタ」

玲子「うん・・・芳姉ちゃんも元気そう、白衣着てるとやっぱカッ「いいね」

芳子「何言ってるの」

玲子「（新吉郎を見て）お父さん」

玲子を見てしばし見つめる新吉郎。

新吉郎「・・・はて、どちら様でしたかなあ」

玲子「！・・・」

淳子「お父さん！」

玲子「いいってそんなの」

元村「いやいや玲子さんのお芝居はなかなか素晴らしいですよ」

新吉郎「最近はやんとした役貰える様になったのか？」

玲子「うん。今度の公演でやっと主役が取れそうなの」

新吉郎「そうか！ やったか」

玲子「うん」

新吉郎「イヤ、俺はお前ならいつかやるとは思ってたが」

玲子「嘘ばかり、最初っから大反対してたクセに」

新吉郎「反対はしたけど才能はあると思ってたぞ」

玲子「調子いいこと言っちゃって」

新吉郎「そうか・・主役か、それは楽しみだな」

玲子「それとね父さん・・（上手に）啓ちゃん、入って来て」

上手のドアから武崎啓一（31）が入って来る。ス

ラックスにはセーターと言う様な、一見何をして

いる人なのか分からない出で立ち。

玲子「私この人と結婚するの」

新吉郎「えっ！」

武崎「初めまして、武崎啓一と申します」

側に来る武崎。

新吉郎「玲子、結婚するのか！」

玲子「うん！」

淳子「玲子、アンタ何言ってるの急に」

玲子「お姉ちゃんたちにも紹介するね、青年実業家の武崎啓一
さん」

芳子「青年実業家？」

武崎「宜しく願います」

玲子「いずれは大企業の社長さんになる凄い人なんだよ、私が
女優をやってくのを支えてくれるの」

武崎「はい」
淳子「大企業って、何の事業をなさる」予定なんですか」
武崎「いろいろです」
淳子「いろいろって？」
武崎「はい……」

何故か困って玲子の顔を見る武崎。

咄嗟に「何でもいいから上手く喋って！」とジェス

チャーする玲子。

武崎「はい……あの、多角型経営の情報コンサルタントを始めた
めたいと思っております」

淳子「何よそれ？」

武崎「はい……例えばある程度まとまった資本金を元に、何か
将来性のある企画を企業としてバックアップして、ゆくゆくは市場を独占する様な大企業に育てて行くと

アレです」

淳子「アレって何ですか？」

武崎「だからあの……アレですよ、ほら、ヤフーとか、ホリエ
もんとか」

淳子「ああ、あのITのことですか？」

武崎「そう、それです」

芳子「それでつまりどういう事なんです？」

武崎「つまりその儲かるってことですよ、そうだ！ 良かったら
お姉さん達も僕の事業に出資しませんか、一年で5
0パーセントの金利を付けてお返ししますよ」

芳子「……胡散臭い」

淳子「いかがわしい……」

新吉郎「そうか、君はそうとう遣り手らしいな」

武崎「いずれは長者番付けのトップを占めてごらんにいれます」

新吉郎「それで、本当に玲子を貰ってくれるのか」

武崎「貰うだなんてとんでもない！ 果たしてこんな僕が相手

でお許しを頂けるのかと心配で心配で、こんな素晴らしいお嬢さんを、僕のような者が頂いてしまっても宜しいのでしょうか」

呆氣にとられる淳子と芳子。

新吉郎「ハッハハ、そんなキミ、何を言うのかね、玲子はそんな立派なもんじゃないんだよキミ(嬉しそう)」

淳子「ちよっと玲子」

と玲子を隅っこに連れて行く。

淳子「(小声で)何よあの男、ヘンよ、怪しすぎるわよ」

玲子「へ？ 何で？」

芳子も側に来る。

芳子「私もそう思う・・なんだかイカサマ師みたい」

玲子「なんで？ そんなお姉ちゃんたち失礼だよ、こんな立派な人捕まえて」

武崎「(淳子たちに)あの、僕が何か？」

玲子「ううん、何でもないの」

武崎「？」

改めて胡散臭そうな目で武崎を見回す淳子と芳子。

武崎「しかし驚きました。本当にお姉さんたちもお綺麗で、玲子さんの言う通り素晴らしいご家族ですね」

新吉郎「ありがとう！ 武崎君！ 玲子を宜しく願いますよ」

側へ来て新吉郎の差し出す手を取り握手する武崎。

武崎「こちらこそ！ 若輩者ですが宜しくお願いします」

新吉郎「んん、良い青年だ・・・」

武崎「お父さまのことはかねがね玲子さんから伺っております。アリカワ製菓の会長様でいらっしゃるんですね」

新吉郎「まあな、アリカワ製菓は今亡き妻と一緒に俺が一代で築き上げたんだ・・・君も知ってるだろう、みなとのメルヘンと言ってお菓子を」

武崎「はい、えっ、あれってその、お父様がお作りになったんですか？」

新吉郎「そうだ」

武崎「そうだったんですか、僕も何回か食べたことがあります、物凄く美味しいですよ」

新吉郎「ありがとう。みなとのメルヘンのお陰で俺の会社は大きくなった。それを今は長女の婿であるこの元村に任せてね、俺は病氣になったので5年前に会長職に退いたと言
う訳だ」

武崎「素晴らしい！ 玲子さんからお噂を聞いてどんな立派な方なのかと、尊敬の念を抱いております」

淳子「わざとらしい・・・」

芳子「玲ちゃんいつからあの人と付き合ってるの」

玲子「半年くらい前かな」

芳子「半年？ 半年で結婚相手決めちゃったの？」

玲子「運命の出会いって言うのかな、ビビってきちゃったの
ビビって、ねっ啓ちゃんっ！」

武崎「（振り返り）うん！」

芳子「啓ちゃんてアンタ・・・」

淳子「ダメよ玲子、アンタ騙されてんのよ、絶対ダメよこんな男」

武崎「こんな男？」

玲子「何だよ」

芳子「私もそう思う、少し落ち着いてあの顔見てみなさいよ、あの顔は嘘をついてる顔だよ」

玲子「そんなことないよ」
淳子「人間じゃないってあの顔は」

思わず自分の顔を覆う武崎。

玲子「もう！ あんまり酷いこと言わないでよ、なんだよ姉さんたち私がつかんだ幸せなのに喜んでくれないの」

淳子「アンタの為を思うから言ってるんじゃない」

玲子「そんな、もういいよ、お姉ちゃんたち祝ってくれなくていい」

芳子「ちよっと、玲ちゃん」

玲子「姉さんたちが何て言ってたって私は啓ちゃんと幸せになるんだから、ねえ啓ちゃん」

武崎「うん！（新吉郎に）お父さん、あ、失礼、まだ正式に婚礼の儀も執り行なっていないのに、お父さんと呼ばせてもらうのは早々でしたね会長様」

新吉郎「いや、いいんだいいんだ。俺はもう今日死ぬんだから、どうせ式にも出られんのだし、どんどん呼んでくれどんどん」

武崎「はい、お父さん！」

新吉郎「んん、良い響きだ。・そうか、玲子が嫁に行くか、長女の淳子には元村がいるが、芳子と玲子も良い歳なのに独身で、この先一人で生きて行くのかと思うと、とても心残りだったんだよ。いやあ、メデタイメデタイ、武崎君、本当にどうもありがとう」

武崎「ハイッ、どうか安心して冥土へとお旅立ち下さいませ」

淳子「ちよっとお父さん、今日の今日来て挨拶しただけなのにそんな全幅の信頼しちやっ正しいの？」

新吉郎「だってしょうがないじゃないか、俺にはもう今日しかないんだから、イカサマ師だろうがインチキだろうがこの際結婚して貰った方がいいじゃないか」

芳子「そんなお父さん無責任だよ」

淳子「玲子の結婚相手なのよ、もうちょっとどういう人だからかよく話を聞いてから」

新吉郎「もう聞いた」

淳子「もう少しじっくり観察するくらいのことが必要でしょう」

武崎を確かめる様に見つめる新吉郎。

武崎「僕は玲子さんのことを海の底よりも深く愛しています」

新吉郎「合格！ 完璧だ！」

淳子「何よそれ」

武崎「例え地球が壊れたとしても僕が玲子さんだけは絶対守ってみせます」

開いた口が塞がらない淳子。

芳子「父さん死ぬの少し延ばした方がいいんじゃない」

淳子「そうだよ、だってまだそんな父さん。ピンピンしてるのに慌てて死ぬことないじゃない」

新吉郎「これは薬のお陰だ」

元村「社長、私からも願います。そう死に急がずに一日でも長く僕たちの為に生きていて欲しいです」

新吉郎「お前たち、俺がどれだけ苦しんだのか知ってるか」

しんとする一同。

新吉郎「芳子は知ってるな」

芳子「……」

新吉郎「死ぬより辛い苦しみと言うモノを自分の身体で感じたことがあるか……」

一同「……」

新吉郎「俺は知ってるぞ、もうこれ以上あの苦しみは味わいたくない……」

淳子「だからってそんな・・・」

新吉郎「もう絶対に助からないと言う医者の子タイコ判も貰ってるんだ」

淳子「・・・」

新吉郎「サア、今日は期せずして俺の人生最後の日の誕生日だ」

淳子「何が期せずしてよ、自分で勝手に決めたクセに」

玲子「そうだよ私だって連絡受けて慌てて来たんだから」

淳子「父さん昔っからそう。何でも自分の思いどおりに勝手に決めちゃうんだから」

新吉郎「とにかく今日は冥土へ旅立つ俺と、結婚を決意した玲子の晴れの門出だ。皆で乾杯して祝ってやろうじゃないか、おい元村、台所からシャンペン持って来い」

元村「はいっ（とキッチンへ行く）」

新吉郎「出来れば淳子も、もう少し元村のことを大事にして仲良くやってくれと、俺はもっと安心してあの世へ旅立てるんだが・・・」

淳子「なーにがもう少し大事によ、それはこっちのセリフです」
新吉郎「元村だって深く反省してるんだろう、少しは許してやるってことも大事なんだぞ」

淳子「父さんが言うかなそういうこと」

シャンペンの瓶とグラスを載せた盆を持って元村が戻って来る。

新吉郎「そうだろ元村」

元村「はい？」

黙っている一同を見回す。

元村「あ・・・何でしょうか？」

新吉郎を睨みつけている淳子。

淳子「(咳払いする)」

新吉郎「(淳子に怖気づき) いや・・・なんでもない」

元村「はあ・・・」

新吉郎「いいか、打たれても打たれてもメゲズに頑張るんだぞ、
そうしていけば、いつか必ず夜明けは来るものだ。な、
鬼の目にも涙と言うじゃないか」

淳子「ちよっとその言い方ひっかかるんですけど」

元村「はい・・・社長・・・申し訳ありません！社長のお嬢様をお
嫁に貰っておきながら、私と言つ男は・・・」

淳子「確かに父さんには責められないわよねえ、浮気のひとつ
やふたつなんか取るに足りないけどでも思ってるんでしょ
う」

元村「そんな、淳子」

淳子「まあアナタや父さんじゃなくっても男はみんな浮気する
ケダモノだってことはよく分かったけど」

芳子「・・・」

武崎「僕はしません！ 僕の目には玲子さん以外の女性はみん
なシナチクに見えます」

淳子「アンタは頭がどうかしてるのよ」

新吉郎「さあさあ今日はメデタイ門出だ。とにかく乾杯しようじ
やないか」

元村「はい・・・」

とシャンペンの蓋をポンと開け、人数分のグラスに
シャンペンを注ぐ。

テーブルに集まって来る一同。

ベッドから起き上がる新吉郎。

芳子「ちよっとお父さん」

新吉郎「ああ、大丈夫大丈夫だって、なっ、いいじゃないか今日
ぐらい、皆と立って乾杯したいんだ」

芳子「……」

シャンペンの注がれたグラスを持って中心に立つ新吉郎。

一同それぞれにグラスを持つ。

新吉郎「それじゃ皆、今日までお世話になりました……」

とグラスを掲げる。

一同「……」

新吉郎「皆のお陰で、俺は充実した人生を送ることが出来たんだ。どうもありがとう……カンパニー！」

一同「カンパニー」

一同グラスを掲げると飲み干し、テーブルに置いて

拍手する。

新吉郎「……うっ……」

とグラスを落とし、胸を押さえる。

玲子「お父さん！」

元村「社長！」

咄嗟に駆け寄って新吉郎を抱える元村と玲子と淳子。

芳子「早く、ベッドに……」

新吉郎「いや、大丈夫だ、スマン、酒なんて……久し振りだから……」

新吉郎をベッドに寝かせる一同。

淳子「無理しないでよもう・・・」

新吉郎「いや・嬉しくてつい自分が病気なの忘れてた・ハハハハ・・・」

ベッドの周りを囲む一同。

語り口が静かになる新吉郎。

新吉郎「いやあ・・・ホントにすまん・・・」

耳に聴診器をつけて新吉郎の胸に当てる芳子。

玲子「お父さん・ホントに大丈夫なの？・・・」

新吉郎「ああ・・・玲子・良い人に巡り会えてよかったな・・・」

玲子「うん」

芳子「・・・急に冷たいお酒が入ったから、身体がビククリしたんだよ」

元村「すいません私がこんなに冷やしたシャンペンを持って来たばっかりに」

新吉郎「謝るなって言ってるだろう・・・バカ・・・」

元村「はあ・・・」

新吉郎「それより・・・皆、俺は大丈夫だから、さっそく今日の本題に入ろう・・・俺の・・・死んだ後の莫大な遺産の分配のことだ・・・皆、今日はそのことが一番気掛かりで来たんだろう・・・」

淳子「何言ってるのよ・・・」

新吉郎「いや、これだけはしっかり言っておかなければ、後々お前たちにつまらん争いなど起こされたら、あの世で母さんに会わせる顔がないからな・・・」

玲子「父さん・・・もう、そんなことどうだっていいよ」

武崎「嫌いじゃないよ玲子ちゃん。お父さんの財産は並大抵のも

のではないだろう。お父さんのおっしゃる通りだ、さすがは立派な方だ。お父さんはガンジーよりも素晴らしい」
淳子「頼むから黙っててよ」

呼吸を整えて語り出す新吉郎。

新吉郎「それでは、遺産の分与について発表する前に、お前たちから俺への別れの挨拶を、一人一人から聞きたい。それぞれがこの俺にどれほどの感謝の気持ちと愛情を持っているかを、心を込めて教えてくれる様に……」

思わず顔を見合わせる三姉妹。

新吉郎「ではまず、長女の淳子から、どうぞ」

淳子「……そうね……（居住まいを正し）父さんはいろいろな家族を悲しませる様なこともあったけど、でもやっぱり

立派なお父さんでした。何より私たちをここまで立派に大きくしてくれて……私たちは社長さんの娘と言うことで恵まれた環境で育つことが出来て、感謝しています。どうもありがとうございます」

新吉郎「うむ……淳子は会計士の資格を取って、俺を助けて会社の為に貢献してくれた……これからも孫の俊弘を大事に育てて……幸せに生きて行ってくれ……」

淳子「……はい、お父さん」

新吉郎「それでは次に、芳子」

芳子「はい……私は何よりも、昔からの夢だった医者になることを、高い学費の学校にも入れてくれて、普通の人だっただけなら出来なかったと思います。お父さんのお陰で自分の夢が実現出来たことを、感謝しています……」

新吉郎「うん、それも勿論だが、芳子は本当によく努力をして、毎晩遅くまで勉強をした。その努力が実ってお医者様に

なれたんだ。俺も誇らしく思う・・・これからも立派な医者を目指して頑張って行くんだぞ」

芳子「はい・・・」

新吉郎「最後に玲子」

玲子「・・・私は姉妹の中で一番わがままを言って、イギリスに留学したり、その後は劇団に入るとか言って心配ばかりかけて御免なさい、これからはこの武崎さんと一緒に、いつかきつと父さんの為にも夢を叶えて一流の女優になります。今までもうもありがとう」

新吉郎「うむ・・・これからは武崎君と二人、手に手を取って頑張ってやっていけ」

玲子「はい」

新吉郎「・・・それでは元村、例のモノを」

元村「はい・・・」

元村はアタッシュケースからうやうやしい仕草でA

4判の封筒を出し新吉郎に渡す。

新吉郎もうやうやしく受け取り、その封筒から異様な模様（タロットカードかマンダラの様な）の付いたA4判の5枚のカードを取り出し、皆に裏が見えない様に扇状に広げて持つ。

新吉郎「この5枚のカードには、特別な力を備えさせてある。その力とは、このカードを持つ者に対して、選ぶ者の愛情の強さによってどれを選ぶかを決めさせると言う力だ。そしてこのカードの裏には、俺の所有する財産の、ビルや土地等の不動産、有名絵画などの目録が書かれている。今からこれを、お前たち三人に選んで貰う。俺に対する愛情の深さによって、それぞれが何を相続するかを決めるのだ」

一同「・・・」

新吉郎「では・・・長女の淳子から、さあ選ぶがよい」

とトランプの様に広げたら枚のカードを淳子に差し出す。

淳子「……はい」

うやうやしく一枚のカードを引いて手に持つ淳子。

新吉郎「裏返してみろ」

カードを裏返す淳子。

「はずれ」と書かれている。

淳子「……」

新吉郎「では次、芳子、引いてみなさい」

芳子「……はい」

芳子も淳子に習ってうやうやしく一枚のカードを引いて手にする。

裏返して見る。

「はずれ」と書かれている。

新吉郎「またはずれか……」

淳子と芳子「……」

新吉郎「それでは、玲子」

玲子も同じようにうやうやしくカードを選ぼうとするが、バツと残り3枚のカードを全てひったくる。

新吉郎「あっ」

カードの裏を見る玲子。裏には全て「はずれ」と書

い」

淳子「えっ！」

芳子「いい加減にしなよもう、元村さんが可哀相だよ」

淳子「何言ってるのよ」

芳子「……」

淳子「私のせいだって言うの」

芳子「……だって、お姉ちゃんお母さんにそっくりなんだもん」

淳子「……」

元村「いや・いいんだよ芳子さん」

淳子「父さんが他所に女作ったのもお母さんのせいだって言う

の？」

芳子「……」

新吉郎「もうやめなさい二人とも」

淳子「父さんは黙ってて！」

新吉郎「……うっ・苦しい・……ううっ、ううううっ……」

胸を押さえて苦しみ出す新吉郎。

淳子「あっ、父さん！」

芳子「お父さん！」

慌てて新吉郎に駆け寄る芳子と淳子。

新吉郎は急に治る。

新吉郎「嘘だよ」

淳子と芳子「……」

新吉郎「コホン、では、冗談はやめて本題に入ろう。みんな座って聞いてくれ」

それぞれ椅子に座る一同。

新吉郎「いいか、アリカワ製菓の財産と俺の莫大な私産は、現社

長であるこの元村隆夫に全ての管理を任せてある。その
仔細な目録を吟味してお前たちの誰に何を譲るかを細か
く検討し、その旨計らう様に元村に託してある・・・そ
うだな元村」

元村「はい」

新吉郎「まず、世田谷の自宅とその敷地70坪は長女である淳子
に。あそこでこれから元村と暖かな家庭を築いて行って
くれ」

元村「はっ・・・ありがとうございます」

淳子「暖かな家庭ねえ・・・」

新吉郎「品川の賃貸ビルの所有権は次女の芳子に。ゆくゆく自分
の病院を開業する時には、あのビルを改装して使うとい
い」

芳子「ありがとうございます・・・」

新吉郎「それから皆には内緒にしてたんだが、恵比寿に俺が隠れ
家にしていったマンションがある」

淳子「皆知ってたけど」

新吉郎「・・・それは、玲子に譲る。今日は期せずして結婚祝い
も兼ねることになったな、どうか武崎君と愛の新居にし
ておくれ」

武崎「ありがとうございますお父さま」

玲子「ありがとうございます」

新吉郎「はあ・・・気分が良い・・・俺の築いた財産でお前たちが
豊かな人生を送って行けるかと思うと、男としての勤め
を果たした気持ちだ・・・それからこの別荘は、姉妹皆
の物だ。これから先もずっと残って、お前たちが将来子
供や孫たちを連れてことあることに集まって、楽しい時
間を過ごす場所だ。俺は死んでもここに留まって、お前
たちの人生を見守っているからな・・・」

芳子「（泣く）お父さん・・・」

しんみりと語り始める新吉郎。

新吉郎「・・・人生の終りか・・・思えば長かったような、短かったような・・・俺は集団就職で東京へ来て、お菓子職人の沢渡先生に弟子入りした・・・そこが辛い日々の始まりだった・・・来る日も来る日もアンコを練って、餅をついて・・・やり方が悪いと怒られて、怒られて、また怒られて・・・ふん、今の若い奴にあんなことが耐えられるか・・・一緒に修行をしてた仲間もいたが、あまりの重労働と安い給料に嫌気がさして皆辞めて行ってしまった。それでも俺は歯を食いしばって頑張ったよ、それから10年もしてやっと、菓子の仕込みを任される様になって、師匠の娘だった母さんと結婚して自分の店を持つ様になった。32歳の時だったよ・・・」

聞き入っている一同。

居眠りをしている武崎。

武崎を肘で突っ突く玲子。ハッと目を覚ます武崎。

新吉郎「それから母さんと二人で、何か自分たちでオリジナルのお菓子を作ろうと考えて、そして考え出したのがみなとのメルヘンだった。クッキーをベースにして洋菓子のホイップとアンコを混ぜて、その配分を決めるまでが大変な苦勞だった・・・いろんなパターンを試して・・・なかなか美味しいと思える味が出来なかったな・・・あの味にたどり着くまでの苦勞と言ったら・・・でもな、出来たあのお菓子を食べた人は皆これは美味しい、これは行けると言ってくれた。それからあのお菓子を置いてくれる店を増やして、会社を作ってここまで来たんだ・・・長い道のりだったなあ・・・まとめて話せば順調な人生だった様に聞こえるが、最初は本当に貧乏で、毎日が苦勞の連続だった・・・でもな、そんな生活の中でも、淳子が生まれた、芳子が生まれた、玲子が生まれた。仕

事に打ち込みながら皆の成長を見つめていた俺は時々こ
う思ったもんだ、これは奇跡だって・・・いいか、お前
たちがいてくれたお陰で俺の人生がどんなに輝いていた
ことか」

淳子「(苦笑し) 私達だけじゃないけどね・・・」

新吉郎「コホン・・・つまり俺が言いたいことは、人生、どんな
に辛い時も、我慢して頑張っていれば必ず報いがあるよ
言うことだ。俺の残したみなとのメルヘンを食べながら
後の人々は歴史を受け継いで行く。そしてこれからアリ
カワ製菓を背負って行く後任の者たちは、社長室にある
俺の肖像を見る度に俺の功績を賛美し、また次の世代へ
と工場を受け継いで行く。そうしてみなとのメルヘンの
味と共に我が社はいつまでもこの国に残って行くのだ・
・・・」

武崎また眠っている。

玲子に肘で突っ突かれて気が付きヨダレを拭く。

武崎「感動しました」

新吉郎「最後に・・・娘たちに言うておくが、これから先、お前た
ちの人生の中で、きっと大変なことがいろいろ起きると
思う。人生とは大部分が退屈なものかもしれないが、時と
して思いもかけなかった事態が起きたりするもんだ、そ
の時は・・・」

幸太の声「(上手から)「ごめんくださあゝゝゝいい!」

一同上手を見る。

ドアを開けてドカドカと太田幸太(28)が入って
来る。

幸太はアマチュアのロックバンドで活動している、
一見してそれと分かるギンギンの出で立ち。片手に
新聞を持っている。

幸太「よろよろ皆さんこんにちわあ」
淳子「誰よ貴方」
幸太「どうも！」

幸太をマジマジと見つめる一同。

芳子「・・・もしかして、幸太・・・さん？」

幸太「（笑顔で）はい」

玲子「ホント！ 幸太さんなの」

幸太「はいどうも、初めまして」

淳子「なんで？ どうしてよ！」

新吉郎「おう！ 幸太！ 幸太来てくれたのか」

幸太「やあ父さん、今日死ぬんだった？」

新吉郎「（喜び）幸太、よく来てくれたなあ、一体何年振りだ、

よくここが分かったな、元村は見つからなかったって言

ってたが」

幸太「（新聞を見せ）尋ね人の蘭に出てるって、お節介なヤツ
が教えてくれちゃってさ」

新吉郎「そうか、さあこっちへ来てくれ」

新吉郎の側へ行く幸太。

幸太「なあんだ、結構元気そうじゃんかよ、せつかく苦しみの
たうち回ってるところを見てやろうと思って来たのに」

元村「幸太さん！」

新吉郎「あっはっはっは」

淳子「何で来たのよ」

幸太「なんだよご挨拶だな、息子が父親の死に目に会いに来ち
やいけねえのかよ」

淳子「どうせ来れば財産が貰えるとか思って来たんでしょ、
ちよっとタカちゃんこの人の居所捜してたって本当なの

「?」

元村「いや、あの(新吉郎を見る)」

新吉郎「俺が頼んだんだ。最後ぐらい、家族皆で会いたいと思って、出来れば皆にこれから先仲良くなって暮らして欲しいと思ったもんでな」

芳子「そんなの無理に決まってるじゃない」

淳子「そうよ、私たちだってこれ以上父さんのワガママに振り回されるの御免だからね」

新吉郎「・・・」

幸太「おうおう・・・醜いねえ・・・最後の最後までやっぱしこの家は呪われた宿命なのかねえ」

武崎「何かの祟りでもあるんですか?」

幸太「?(と見る)」

武崎「申し遅れました。玲子さんのフィアンセの武崎啓一と申します。どうかお見知り置きを」

幸太「ふうん、玲子って?」

玲子「私です、幸太さん・・・はお兄ちゃんだよね」

幸太「そうかな、昭和何年?」

玲子「56年」

幸太「2つ上だな俺の方が」

玲子「いるのは知ってたけど・・・どんな人かなって思ってた」

幸太「(笑い)こんなヤツだよ、そうすると後の二人は俺のお姉ちゃんかな、なんかふたりとも結構年増っぽい」

淳子「うるさいわね」

玲子「あの、バンドか何かやってるんですか」

幸太「ああ、まあね」

玲子「私、劇団で演劇やってるんですけど、あの、バンドのライブとかあるんですか」

幸太「ああ、やってるよ」

淳子「ちょっと玲子、あんまり親しくしないでよ」

芳子「そうよ、私たちはこの人の存在は認めてないんだから」

玲子「なんで、いいじゃん兄妹なんだから」

淳子「ダメよ」

幸太「おうおう、こりゃまたご挨拶だな、感動の兄妹ご対面かと思ったら、存在を認めてないときたもんだ」

玲子「私は嬉しいよ、だってずっと気になってたから、お兄ちゃんってどんな人かなって」

幸太「なあ、昔さ、小学校の頃、親父土日は毎週家にいなかったんじゃねえ？」

玲子「そーそー、いっつも週末家にいないからどうしてだろうって思ってた」

幸太「そんな俺んちに来てたんだよ」

玲子「そっかあ、私一度お母さんに何でって聞いたら、工場の方に泊り込みでお仕事してるから、って言ってたけど」

幸太「そうか、俺んちは工場ってことになってたんだ。俺の方はお父さんなんで土日しか帰ってこないのって聞いたたら、平日は全部地方へ出張してるからって母さん言ってたよ」

玲子「あっはは、そうだったんだ」

新吉郎「・・・」

幸太「でもさあ、俺中学くらいまではずっと親父は一生懸命働いてる良い父親なんだとばかり思ってたぜ」

玲子「私もくだってお母さん父さんは私たちの為に一生懸命働いてくれるんだから感謝しなさいって言ってたもん」

幸太「そうかあ、可哀相になあ、うちのお袋も」

玲子「うちもく（苦笑）」

新吉郎「くっ・・・苦しい」

淳子「嘘つきなさいよ」

新吉郎「・・・」

幸太「でも高校一年の時だよなあ・・・」

玲子「・・・」

幸太「結局俺ん家のことは捨てやがって」

間。

玲子「・・・でも、ウチも大変だったんだよ・・・毎日お母さん泣いて・・・」

芳子「そうだよ・・・私たちだって、怖かったんだから、お父さんが、出て行っちゃうんじゃないかと思って・・・」

幸太「つまりそんな時そっちが捨てられてりゃあ、俺の母親は泣かずにすんだって事だろ・・・」

芳子「・・・」

玲子「ねえねえ幸太兄さんこの人どう思う？ 私この人と結婚するんだけど」

と武崎を指す。

幸太「（見て）うん・・・アンタとは何か気が合いそうだな」

武崎「僕もそう感じてました」

幸太「冗談だよ」

新吉郎「武崎君、紹介しておこう。コレは幸太と言ってな、聞いての通り俺が若い頃に外で作った愛人の息子なんだよ、あっはっはっはっ・・・」

武崎「さずがお父さん」

新吉郎「まあ決して自慢出来る話じゃないんだがねえ、はっはっはっはっ・・・」

シラッとしている他の人々。

幸太「ふん、アンタ俺たちにどれだけのモン背負わせてると思ってるんだよ、よくも笑い飛ばせるもんだよなあ、尊敬するよダンテ様」

武崎「ダンテってあの悪魔の王様のことですか」

新吉郎「ふっふふ（武崎に）なあ、活きがいいだろう、なんと言おうがこいつは俺の勲章だ。男の子はいいぞお、女の姉妹なんて最悪だ」

芳子「それじゃ今日のトドメのモルヒネは幸太さんから恨みを込めて注射してもらったらお父さん」

幸太「フン、御免だね、俺はこの人が苦しみ悶えて死んでくることが見てえんだから」

芳子「そりゃ残念ね、父さんは何の苦痛もなく、安らかに眠る様に息を引き取る予定なの」

幸太「そっか、それじゃつまねえから帰るかな・・・」

新吉郎「おい・・・待て、待ってくれ幸太」

とベッドから起き上がり、幸太を追おうとする。

幸太「（見る）」

幸太を見つめる新吉郎。

新吉郎「・・・どうだ、最近エレキはやってるのか」

幸太「・・・ああ、バリバリだよ、近いうちにプロデビューすることに決まってるから」

新吉郎「そっか、あれ、俺が買ってやったエレキでまだやってるのか」

幸太「あんなもんもうポンコツで使い物になんねえから人にやっちゃまったけどよ・・・今は別のでやってるよ」

新吉郎「そっか・・・」

幸太「お前が来てくれたのなら話は別だ。俺の残した財産を受け取ってくれるか」

幸太「財産？ フン、アンタにまだそんな物が残ってるのかよ」

新吉郎「ああ、俺が長年アリカワ製菓の業績で築いた莫大な財産だ」

幸太「へ？ だってアンタの会社は倒産したんだろ？」

芳子「あっ、バカ！」

淳子「幸太何言うのよ！」

新吉郎「なんだ！ ハッキリ言え！」

元村「はっ・・・実は我が社は、去年の年明けあたりから急激に業績が下がり出しまして・・・」

新吉郎「なんだと？ なんで」

元村「・・・」

新吉郎「だってお前、毎月ちゃんと売り上げ報告を・・・アレはニセ物か」

元村「は・・・」

新吉郎「なんだ！・・・どう言うことなんだ」

元村「・・・」

淳子「・・・タカちゃんが生産コストを抑えようとして商品の品質落したりするから、お客さんが離れていっちゃったんじゃない」

新吉郎「なんだと？」

淳子「それに下がった業績を投資で巻き返そうなんて考えて、慣れない飲食業とアパレル会社に投資してみんな失敗し

ちゃったのよ」

元村「いや、あのそれはですねえ、絶対に成長する企業だって

あの・・・」

新吉郎「何を言っとるんだお前は・・・」

元村「はい・・・それでも一時は従業員の賃金引下げにもかかわらぬ奮闘もあり持ち返したのですが、下半期に入るとその努力も虚しく、生産量も減らさざるを得ない状況に追い込まれていきまして、ついに・・・今年ついに・・・」

ワナワナ震えている新吉郎。

元村「も・・・も・・・」

元村はバツと新吉郎の前に土下座する。

元村「申し訳ございません！」

新吉郎「こっ……このおお……バカ者がああ！」

と元村をハリセンでメッタ打ちにする。

幸太「あっははははは……ああっははははははは……」

新吉郎「（淳子や芳子を見て）お前たちは知ってたのか！」

淳子「……」

芳子「……」

新吉郎「隠してたのか」

玲子「……だって、その方が父さんも幸せな気持ちで死ぬると
思ったからじゃない」

新吉郎「なんだと……こっ……この……バカ者が……うぐっ……
……うぐっ（胸を押さえる）うぐっ……」

自分の胸を抱きしめる様にして苦しみだし、うずく

まる新吉郎。

芳子「お父さん！ お父さん！」

ベッドに駆け寄る淳子、玲子。慌てて聴診器を当てる芳子。

新吉郎「うぐうううう……痛い……痛い……」

淳子「（幸太を睨みつけ）こんなことして何が楽しいのよ！」

芳子「血圧が上がってる」

薬剤を選んでテキパキと注射器に薬液を注入して刺す芳子。

玲子「酷いじゃないよ幸太さん。皆で会社のこととは黙っていいよ
うって約束してたんだよ、今日はお父さん最後の日だった」

て言うのにそんなこと知らせなくたっていいじゃんかよ
う」

幸太「……」

正座したまま歯を喰いしばっている元村。

芳子「父さん・父さん……」

新吉郎「……」

幸太「……ふん、なんだよ皆して、結局騙そうとしてたんじ
やねえか」

芳子「違うわよ」

幸太「何が違うんだよ、皆して口裏合わせて、もう会社も何も
ねえのに、財産貰って喜ぶ振りかなんかしてたんじゃね
えのか」

芳子「その何処がいけないのよ」

幸太「だってそんなの嘘だろ」

武崎「ちよ、ちょっと待って下さいよ皆さん」

一同「？」

武崎「あの、そのお父さんの築いた会社と言うのは、もう既に
倒産してしまっている訳ですか？」

幸太「そうだよ」

武崎「そうするとそのう……新吉郎さんの遺産は」

淳子「何にもないわよ」

武崎「何にも？」

淳子「そう、何にも」

ガックリとうな垂れて膝まづく武崎。

玲子「あっ、あの、あれはホラ、いつか父さんの言ってた魯山
人（ろさんじん）の壺を隠してあるとかって……」

武崎「魯山人の壺？」

玲子「うん、昔父さんが闇のバイヤーから買ったんだって、今

ではひとつも残ってない貴重な物で、へたすると時価数億円はする品物なんだって」

芳子「あれは作り話じゃないの」

淳子「ううん、ホントにあったの、私見せて貰ったことあるのよ」

武崎「それで！ それは何処にあるんですか？」

淳子「それが、会社の負債の為に全部の財産調べた時に探してみただけど、どこにあるのか見つけれなかったのよ」

武崎「そんな！ 元村さんも知らないんですか」

元村「はい．．それはきつと、社長だけが隠し場所を知ってるのではないかと思えます．．」

武崎「そ．．そんなあ．．芳子さん、お父さんの容態は」

芳子「さあ．．どんだん鼓動が弱まってるから、もしかしたらもう意識が戻らないかもしれないわ．．」

淳子「お父さん．．」

武崎「そんな、このままお父さんの容態が戻らなければ、もう

永遠に魯山人の壺のありかは分からないと言っことですか」

芳子「そつよ．．」

武崎「（側に来て）お父さん！ お父さんっ！ しっかりして下さい」

新吉郎「．．．．」

全く反応を示さない新吉郎。

武崎「．．．（時計を見て）あつ、大変だ、僕急に大事な用事思い出した。行かなくちゃ．．」

玲子「えっ、啓ちゃんどうしたの」

武崎「忘れてたよ、今朝ウチの親父が倒れたって連絡貰ってたんだ」

玲子「えっ」

武崎出て行こうとする。

玲子「そんな、待ってよ」

と武崎の腕をつかむ。

玲子の腕を取って見つめる武崎。

武崎「玲子ちゃんは自分のお父さんに付いててあげるんだ、分

かったね・・・」

玲子「(見つめ)・・・うん」

武崎「しっかりするんだ、いいね」

玲子「うん・・・啓ちゃんも気をつけて」

武崎「ああ・・・それじゃ」

武崎出て行く。

新吉郎の呻き声があがる。

新吉郎「うっ・・・うっううっ・・・」

武崎戻って来る。

武崎「お父さん、意識が戻ったんですか？」

新吉郎「うっううう・・・」

玲子「啓ちゃん」

武崎「奇跡だ！ 僕たちの祈りが通じたんだ」

と新吉郎の側へ来る。

武崎「お父さんっ、しっかり！ 魯山人の壺は何処にあるんですか」

新吉郎「うっううっうっ・・・」

淳子「お父さん」

玲子「お父さん・・・」
新吉郎「うう・・・」

目を開ける新吉郎。
見守る一同。

新吉郎「ふう・・・（皆を見回す）」

芳子「父さん」

元村「社長・・・」

新吉郎「アレ？・・・何だ皆集まって、今日は何かあるのか」

淳子「・・・また冗談なの？」

新吉郎「・・・」

玲子「お父さん？」

新吉郎「玲子・・・はは・・・久しぶりだな、おい芳子、今日はどうしたんだったかな？」

芳子「今日はお父さんの誕生日でしょう。それで皆集まってく

れたんじゃない」

新吉郎「おお・・・そうか、そうだな、そうだったそうだった・・・そうそう、玲子がフィアンセの武崎君を紹介してくれたんだったな・・・」

芳子「（笑い）そうだよ・・・もう、ビックリさせないですよ・・・」

ホッとする一同。

新吉郎は幸太を見て驚く。

新吉郎「幸太！ 幸太じゃないか、来てくれたのか」

幸太「・・・」

新吉郎「そうか・・・ありがとう、よくここが分かったな、はっはは何年振りかな、いや、元村に捜させてたんだが結局見つからなかったと言われてガッカリしてたんだ・・・」

幸太「いや・・・この新聞の・・・」

と新聞を取って見せようとするが、芳子がバツと取り上げる。

新吉郎「どうだ、エレキはやってるのかエレキは」

幸太「あ、ああ・・・バリバリだよ、今度プロデビューするんだ・・・」

新吉郎「そうか・・・みんなに紹介しておこう、お前たちの兄弟の幸太だ」

淳子「は・・・初めまして」

芳子「よろしくお願いします・・・」

玲子「お会い出来て、光栄です・・・」

新吉郎「いや、良かった。本当に良かった。これで俺の最後の務めが出来ると言うもんだ」

芳子「そうだね・・・父さん良かったね」

新吉郎「（微笑み）武崎君」

武崎「えっ？ はっ・・・はい」

新吉郎「こいつはねえ、俺が若気の至りで外で愛人に産ませた子供でねえ、このとおり見てくれはワルで中身もワルなんだが、コレは俺の勲章みたいなもんでね」

幸太「コレってなんだよコレって、俺はちゃんとした人間だぞ」

武崎「はあ、素晴らしい勲章です。それで、魯山人の壺は・・・」

新吉郎「ところで幸太、幸恵はどうしてる？」

幸太「母さんは死んだよ、去年の夏に」

新吉郎「えっ、なんで」

幸太「蜘蛛膜下出血で」

新吉郎「そうか・・・」

幸太「・・・」

新吉郎「すまなかったな・・・」

しよんぼりしてしまう新吉郎。気を取り直して話し出す。

新吉郎「・・・皆にも今のうちに言っておくからよく聞いてくれ、アリカワ製菓の財産を含む俺の莫大な遺産の財産分与は、まず遺留分として法で定められた規定に従い、全ての半分を娘たち三人に分け与える。そして残った半分、相続税を差し引いてもおよそ一億円相当は、今まで一番苦勞をかけたこの幸太に相続させてやりたいと思う。いいな皆」

幸太「親父、実は」

芳子「しっ！（と幸太を制する）」

新吉郎「・・・幸太・・・そうか、幸恵は先に逝ったか・・・」

幸太「・・・」

新吉郎「幸恵の最後は・・・どんな・・・」

幸太「去年の一月に急に倒れて、そのまま入院したけど殆ど意識のないまま半年くらい生きてたよ・・・俺ももうこりやダメだなんて思ってたんだけど・・・」

新吉郎「・・・」

幸太「そしたらある日病院から連絡が来て、見に行ったらもう死体になってたよ、病院の病室で、一人で死んでた」

新吉郎「・・・」

幸太「・・・もうそんなことどうだっていいよ」

新吉郎「幸太・・・俺は、幸恵を愛してたぞ、本当だぞ、出来ればもっと、いろいろしてやりたかったんだ。でももう、取り返しがつかなくなってしまうが・・・俺の最後の言葉として聞いてくれ、俺は生涯幸恵のことを一番愛していたんだ」

幸太「・・・」

淳子が芳子の持っていた新聞をバツと取り、新吉郎に広げて見せる。

淳子「せっかくだけど父さん、父さんの会社は間抜けなタカチ

やんの為にもう倒産して無くなりました。財産なんか一円も残ってないしこの家もとっくに抵当に入ってた取り壊しになるかもしれないのよ」

芳子「姉さん！」

新吉郎「なんじゃと？」

と淳子から新聞を取って見る。

新吉郎「！・・・そんな・・・そんなバカな・・・元村！」

元村「はいっ！」

新吉郎「どういうことだ！」

バツと新吉郎の前に土下座する元村。

元村「申し訳ありません！ 申し訳ありません社長」

新吉郎「なっ・・・なにやってたんだこっ・・・この・・・このクソ

バカ野郎があゝ！」

ハリセンで元村をメッタ打ちにする新吉郎。

新吉郎「ウグッ・・・（苦しみ出す）」

痛みに顔をしかめてうずくまる新吉郎。

芳子「お父さん！」

玲子「お父さん」

駆け寄る玲子と武崎。

武崎「ああっ、お父さん、しっかりして」

テキパキと注射の用意をして刺す芳子。

玲子「(淳子に) 姉さん! どう言うつもりなのよ」

淳子「母さんよりもあの女を愛してたなんてこと、許せないわよ」

幸太「(淳子を見る)」

新吉郎をベッドに寝かせる武崎と玲子。

芳子「(聴診器を当て) . . . もう . . . ダメかもしれないわ . . .
. . .」

元村「社長(駆け寄り) . . . 社長(泣く)」

幸太「もういいんじゃないのか . . . なあ、もう充分苦しんだんだろう、もう逝かせてやったらいいじゃないかよ」

武崎「そんな、まだ早すぎますよ、だってまだパーティーは終わってないじゃありませんか . . . それに」

幸太「魯山人だろ」

武崎「その通りです」

芳子「だけど私も、さっきの父さんの言い草は許せない . . .
幸太さんは幸太さんで大変だったかもしれないけど、私
たちだって . . .」

元村「こんな終わり方で良いんでしょうか、こんなことで、社長の意識が戻る度に皆で血圧の上がる様なことをして、苦しめて、私の頭をひっぱたかせて、これじゃまるで拷問ですよ」

淳子「元はと言えば会社を潰したアンタが悪いんですよ」

元村「 . . .」

幸太「まあ半分は自業自得かもしれないねえけどな」

元村「 . . . どうでしょう皆さん、今度もし社長の意識が戻ったら、もうどんなことがあっても最後まで、社長の言葉を黙って聞いてあげようじゃないか、そして、財産を貰ってありがとうと心から御礼を言ってあげようじゃないか、皆に本当に言い残したことはないか、し

っかり聞いて、最後の別れをさせてあげようじゃありませんか」

芳子「・・そうだね、元村さんの言う通りだよ・・」

武崎「そうです、それから魯山人の壺のありかも聞かなくてはなりません」

淳子「(睨む)・・」

呻き声をあげる新吉郎。

ハツとして新吉郎を見る一同。

新吉郎「うっ・・うう・・」

芳子「お父さん」

目を開ける新吉郎。

辺りを見回す。

淳子「父さん」

新吉郎「みんな・・余計な気を使わせて、悪かったな・・」

芳子「えっ？」

新吉郎「もういい・・もう分かった」

一同「・・」

新吉郎「元村」

元村「はい」

新吉郎「すまなかったな」

元村「そんな・・」

新吉郎「ふふ・・そうか、アリカワ製菓は倒産したのか」

元村「申し訳ありませんでした！」

新吉郎「もういい・・時代の流れだろう・・」

元村「は・・」

新吉郎「(笑う)ふっふふ・・そうとも知らずに俺って奴は・・

・・みんな本当にすまなかったな」

一同「・・」

新吉郎「それで元村、お前、今はどうしているんだ、仕事は」

元村「はい・・・あの、以前取り引きのあったお得意先にちよつと空きのポストがあると云つこととで、呼んで頂きまして、今は・・・そこで・・・」

新吉郎「そうか・・・それじゃ、大丈夫なのか」

元村「はい・・・」

淳子「・・・」

新吉郎「そうか・・・しかしそうすると・・・みなとのメルヘンは、もう何処にもないということか」

元村「・・・」

新吉郎「あんなに皆に喜ばれて、一時は生産が追いつかない程の注文で溢れ返っていたお菓子だったのに・・・俺が母さんと作った・・・」

元村「くっ（泣く）本当に社長・・・申し訳ありません・・・」

新吉郎「俺の人生は、最後に来て何もなくなってしまうたか、皆に残す物もない、自分の好きな様に生きて来て、結局何

も残らない不毛の人生で終わるか・・・こんなことになるなんて、全くお笑い草だったな、いや、これも自業自得と言うべきか・・・」

芳子「そんな、いいじゃない、父さん今まで精一杯頑張つて来たんだから、私たちだって、ここまで大きくしてくれたこと、感謝してらんだから」

元村「そうですよ、会社が無くなったところで、社長の残した偉大な足跡は皆の記憶としていつまでも残りますよ」

新吉郎「お前が言うな」

元村「はい・・・」

新吉郎「・・・芳子、もういい、殺してくれ」

芳子「えっ」

新吉郎「もういい、さっさと死んでしまいたい、はやくやっくれ」

芳子「そんな・・・出来ないよ」

新吉郎「いいから、早く」

芳子「出来ないわよ」

新吉郎「なんで」

芳子「そんなこと出来る訳ないでしょう、殺してくれなんて言われて出来る訳ないじゃない」

新吉郎「約束したじゃないか、今日の終りに逝かせてくれるって」

芳子「まだ今日は終わってないわ」

新吉郎「だからもういいって言うてるじゃないか」

淳子「何がいいのよ、父さんとの別れがこんななんて嫌だから」

新吉郎「まだ俺を生かしておくと言うのか、まだこの苦しみを味わえて言うのか・・・俺はもう一刻も早くこの世から消えてしまいたいのに」

玲子「父さん・・・」

新吉郎「お前たちはまだ俺を許してくれないのか・・・」

一同「・・・」

幸太「そんなら俺が殺してやるよ、芳子さん、やり方教えてく

れよ」

芳子「何言ってるの」

幸太「だっていいんだろ、安楽死なんだから、親父を早く楽にさせてやんなきゃ可哀相じゃねえか」

淳子「何言ってるのよ幸太」

幸太「アンタたちがやんねえって言うから俺がやってやろうって言うてんだろ、いいだろ親父」

新吉郎「ああ、頼むやってくれ」

幸太「ふふ、俺が積年の恨みを込めて注射してやるからな」

芳子「ダメよそんなの何言ってるの」

幸太「何でだよ」

元村「社長、言ったじゃないですか、今日は辛気臭いのはダメだって、最後の誕生日だから楽しく皆と過すんだって」

新吉郎「・・・」

芳子「そっだよ、ねえ、姉さんケーキ買って来たんでしょ、皆でお祝いしてケーキ食べようよ、父さんのバースデーケ

「キ」

元村「そうだ」

芳子「玲ちゃんそれ（と箱を指し）ロウソク立てて用意しようよ」

玲子「うん」

と玲子と芳子はテーブルのケーキの箱を持ってキッ
チンへのドアを出て行く。

幸太「父さん・アンタさつき、俺の母さんのこと、一番愛してたなんて言ったけど」

新吉郎「……」

幸太「じゃなんで何年もほったらかしにしたんだよ、母さんが死んだことも知らなかったクセに」

新吉郎「約束させられたんだ、幸恵とは二度と会わないって、うちの母さんと・お前が高校生だった時、俺は母さんに

持たされて、まとまった金を包んで幸恵のところに持って行った……」

幸太「……」

新吉郎「幸恵はその金を俺に突っ返すだろうと思ってた。バカにするんじゃないって怒るだろうと思ってた……ところが幸恵は、黙って受け取ったよ……ショックだった」

幸太「……」

新吉郎「そうか、幸恵は死んでしまったのか……幸恵と別れてから何年かした時、俺は、一度だけ幸恵を見たことがあるんだ……新宿で、駅前の広場で遠くから歩いて来て、アレ、もしかしたら、って思ったんだ……最初は似てるな、って思ったんだけど、近くまで来て間違いないと思った。声をかけようか、どうしようか迷ってるうちに、俺に気が付かずにすれ違って行った。そのまま歩いて、人ごみの中に見えなくなってしまった……」

幸太「……」

新吉郎「あの時、大きな声で呼べば良かったな・・・幸恵・・・」
幸太「・・・」

7本のロウソクを立てたバースデーケーキと皿や食器を持って芳子と玲子が戻って来る。

元村「あっ、来た来た」

拍手する元村と武崎。

ケーキをテーブルに置き、7本のロウソクに火を灯す玲子。

玲子「ねえ電気消そうよ」
芳子「そうだね」

と部屋の明かりを暗くする。

7本のロウソクの灯りだけが浮き立つ。

ケーキを新吉郎のベッドへ持って行く玲子と芳子。

玲子「お父さん、70歳のお誕生日おめでとう」

新吉郎「70年か・・・」

芳子「70年間本当にご苦労様でした」

淳子「・・・父さん、皆で歌うから、ロウソク吹き消してよ」

玲子「皆いい？ 唄うからね、サンシィ・・・」

一同「（唄う）ハッピーバースデートゥーユ〜ハッピーバースデー
トゥーユ〜ハッピーバースデーディアしんきちろう〜ハッ
ピーバースデートゥーユ〜」

新吉郎を見守る一同。

新吉郎「・・・」

ロウソクを吹き消す様にと、新吉郎に頷いて促す淳子や玲子。

思いを振り切る様に顔をしかめ、ロウソクを吹く新吉郎。

苦勞しながら思ま思ましそうに7本のロウソクを吹き消してしまふ。

一同「拍手する」

電氣を点ける元村。

玲子「おめでどう」

淳子「おめでどうお父さん」

芳子「良かったねお父さん」

新吉郎「・・・」

淳子「父さん？」

新吉郎「(ゆっくり後にもたれ、目を閉じる)・・・」

芳子「父さん・・・(脈を取り)眠ったみたい・・・」

玲子「これでもう、さよならかなあ」

芳子「分からないけど・・・」

ケーキをテーブルに置く玲子。

疲れた様に椅子に座る一同。

芳子は新吉郎の側にいる。

玲子「(新吉郎を見て)もう、父さんとお話出来ないのかな・

」

淳子「・・・」

芳子「お父さんは幸せな方なのよ、病院でお年寄りが死んでく

の何人も見たけど、父さんはこんな風に皆に看取られて逝けるから幸せなのよ。酷い人なんか家族も来ないで、

遺体を引き取りにさえ誰も来ない人だっているんだから

・」

淳子「それはきつと、その人のそれまでの生き方の結果なんでしょうけどね」

幸太「それって俺の母さんのことかよ」

芳子「あ、ごめんなさい、そんなつもりじゃ・・・」

幸太「ふん、いいよ、お袋だってきつと、愛人やってりやそんな風に死ぬ日も来るかもしれないことぐらい、覚悟してたんだろっから」

芳子「ごめんなさい幸太さん、私本当に・・・」

幸太「いいって、分かってるよ」

玲子「(淳子に) お姉ちゃん、お葬式はどうするの?」

淳子「うん、もう準備はしてあるから・・・」

玲子「ふう・・・とうとうお父さんもお母さんもいなくなっちゃうんだね」

淳子「もう私たち立派な大人なんだから、これからは自分で生きて行かなきゃ」

芳子「そうだね・・・玲子は今度主役が貰えるんでしょ」

玲子「うん・・・」

淳子「芳子だってもう立派な内科のお医者さんなんだから」

元村「社長は芳子さんが医者になった時、本当に喜んでいらっしやいました」

芳子「・・・」

玲子「淳姉ちゃんと元村さんだって、会社は無くなっちゃったけど、これからまた新しい門出だもんね」

淳子「うん・・・」

元村「・・・」

淳子「(芳子を見て) 父さんはどう?・・・」

新吉郎の脈を取る芳子。

芳子「うん・・・まだかすかだけど・・・脈がある」

側へ来て新吉郎を見る淳子。

朦朧とした様子で薄っすらと目を開ける新吉郎。

新吉郎「・・・うう・・・」

淳子「・・・父さん」

新吉郎「・・・（目を開けて淳子を見る）」

淳子「・・・」

新吉郎「ああ・・・母さんか」

淳子「え？」

新吉郎「・・・そのブラウス・・・まだ着てたのかい」

淳子「（ハツとして見る）・・・」

新吉郎「古くなったから新しいのを買ってやるって言ったのに、

最初に買って貰ったのだからって、いつまでも大事に着
ていたな・・・」

淳子「・・・」

新吉郎「・・・迎えに来てくれたのかい？」

淳子「・・・」

新吉郎「今日は皆がお祝いで送ってくれたよ・・・みんな母さ
んに似て優しい子供たちだったよ・・・」

一同「・・・」

新吉郎「・・・母さんには苦勞ばかりかけちゃったな」

淳子「・・・」

新吉郎「そつだ母さん、玲子が結婚することになったよ」

淳子「・・・」

新吉郎「武崎君、武崎君・・・」

武崎「はっ、はい！（と来る）」

新吉郎「武崎君と言ってね、将来大会社の社長さんになる人なん
だそつだ。なっ、いい男だろう」

武崎「あの、最後にお父さんに聞いておきたいことがあるんで
すが」

新吉郎「何だね」

武崎「お父さんが持っておられる魯山人の壺は何処にあるんで

すか？」

新吉郎「ああ・あれなら元村がある場所を知ってるよ」
武崎「なんですって？（と元村を見る）」

視線をそらす元村。

元村の側に来て睨みつける武崎。

再び淳子に語りかける新吉郎。

新吉郎「玲子は頑張ってるね、劇団で主役をやることになったんだよ、ふふ・イギリスから帰って急に女優になるなんて言い出した時はどうなることかと思ったけど、頑張ってるよ、続けて来て、とうとう主役が出来るまでになったんだよ、偉いだろう・・・」

玲子「・・・」

新吉郎「芳子は一生懸命勉強して、自分の夢を叶えて内科の医者になったよ、すごいだろう。淳子も心配いらさないよ、俺

たちのお店を継いで元村と一緒に頑張ってる。夫婦仲良くやっているから、何も心配いらさないよ・・・俊弘も元気に育っているよ・・・」

側へ幸太が来る。

幸太「俺のことは心配してくれねえのかよ親父」

新吉郎「幸太・・・はは・・・母さん、もう二度と会わないって言ったのに御免・・・でも最後の日だけはと思って、新聞の尋ね人に掲載したら、それを見つけて来てくれたんだ・・・」
「めんな、幸太のこと、俺の責任だから・・・今はエレキバンドで頑張ってるんだ。元気がいいよ・・・」

幸太「（淳子に）初めまして、真佐子さん」

淳子「!・・・」

幸太「あの世から親父のこと迎えに来たんだろ？」

淳子「・・・」

幸太「だったらあの世で俺の母さんに会ったかい？ 幸恵って言うんだけど、知ってんだろ、それとも俺の母さんは地獄に落ちちゃったから会えなかったかな」

新吉郎「ああ・・・幸太、何を言い出すんだ」

淳子「会いました」

幸太「えっ」

新吉郎「・・・」

淳子「こっちでは二人とも良いお友達になって、仲良くやってます・・・」

幸太「そ・・・」

元村が幸太を無理矢理テーブルの方へ引き戻す。

新吉郎「そうか・・・良かった・・・本当に良かった」

幸太「・・・」

新吉郎「俺は・・・母さんと一緒に天国に行けるかな・・・それと

もやっぱり俺なんかは地獄行きかな・・・」

淳子「一緒に天国に連れて行ってあげますよ・・・」

新吉郎「本当かい？」

淳子「はい・・・」

新吉郎「ありがとう・・・母さんがいてくれたから、俺はずっと頑張って来られたんだ・・・と言うか、頑張らされたと言うか・・・」

淳子「えっ・・・」

新吉郎「・・・店を始めた頃は大変で、辛い思いばかりだったな、母さんに毎日尻を引っぱたかれて、隠れっすい分泣いたもんだ・・・洋菓子店やデパートに行っって、うちのお菓子を置いて下さいって頼んで回ったけど、なかなか置いて貰えなかったな・・・懐かしい、でもここまでお店を大きくして、立派に子供たちも育てて、はあ・・・良い人生だったよ、ありがとう・・・」

芳子が注射の準備をする。

芳子「（小声で）このまま逝ける様に、もう一度注射するから」
淳子「……」

新吉郎の腕を取って握る淳子。
もう片方の手に注射する芳子。
目を閉じて眠りにつく新吉郎。

淳子「……手から力が抜けてく……」

新吉郎の手をそっと胸の上に乗せる。
脈を取る芳子。

芳子「脈が落ちてく……」
一同「……」

芳子は腕を離すとキヤッチライトを出し、新吉郎の
瞼を上げて瞳孔を照らして見る。反応が無いのを確
認する。

芳子「（時計を見て）17時51分……」
淳子「お父さん！」

声を上げて泣き崩れる淳子。

元村「社長！」
玲子「お父さん……」
武崎「さようならお父さん……」
幸太「あばよ……親父」

新吉郎の両腕を布団の中にしまい、顔に白布を被せ

る芳子。

芳子「(合掌する)」

嗚咽を漏らす一同の声が響く。

泣きながら元村の側に来る武崎。

武崎「・・・元村さん、アンタ魯山人の壺の在りか知ってんでし

よ」

元村「・・・」

玲子「もういいって」

武崎「だけど玲子ちゃん」

玲子「もういいよ終りなんだから」

武崎「玲子ちゃん」

玲子「ちゃん付けするのもやめて、キモいから」

武崎「そんな」

玲子「演技し過ぎなんだよ、ワザとらしい、何が長者番付の一

番になるよ」

武崎「俺のこと大企業の社長になるとかって紹介するからだろ」

玲子「あれじゃどうみたってイカサマ師にしか見えないじゃないやな

いよ」

武崎「なんだよそっちこそ騙しやがって、莫大な遺産が入ると

か言っといて」

玲子「やり過ぎなんだよセリフ棒読みでヘタクソ」

武崎「そりゃねえだろ一生懸命やったのに」

淳子「ちよつと、アンタたちどう言うことよ」

玲子「嘘なのよ嘘、今日は父さんに見せる為に武崎君にフィア

ンセになって来て貰ったの」

淳子「ええっ!」

玲子「演技ヘタでしょう〜コレうちの劇団員、実業家どころか

下貧乏男」

武崎「うるせえな、せっかく人が役作りまでしてやってるのに」

淳子「玲子！」

玲子「(舌を出し)ゴメン、最後に父さんに安心させて上げたかったから」

淳子「まさかアンタ、主役に選ばれたって言うのも嘘なんじゃないでしょうね」

玲子「えへへへ」

淳子「あゝあゝ」

と頭を抱える。

玲子「もうちょっとだったんだけどね・・・若い子に取られちゃった」

やった」

芳子「あゝあゝ」

元村「ちなみにあの・・・社長が隠し持っていたと言う魯山人の壺はですね、以前こっそり持ち出して、然るべき鑑定の方に見て貰ったことがあるのですが・・・」

武崎「えっ、そしたら?・・・」

元村「その・・・よく出来た贋作と言うんでしょうか、全く価値のない物だと言うことが分かりまして・・・」

一同「・・・」

武崎「(脱力)・・・なんでもっと早く言ってくれないの(へたり込む)」

元村「アレは社長にとっては宝物みたいな物でしたから、夢を壊す様なこととはしない方が良くないかと思ひまして・・・」

淳子「ふっ、夢どころか会社潰しといて何言ってるのよ」

元村「・・・」

淳子「最後の最後になっていけない気なんか利かせちゃって」

元村「・・・」

玲子「淳姉さんだってホントは元村さんと離婚するつもりなんじゃないの」

淳子「もちよ、実はもうとっくに届けも出して一緒に暮らしてないの」

芳子「ええっ」

淳子「ま、そもそも私はこの人に会社継がせる為に強引に結婚させられた様なもんだから、最初から間違いだったのよ」

元村「そんな淳子、俺はそんなつもりじゃなかったぞ・・・」

淳子「もういいわよ・・・この人本当は就職なんか決まってるの、なーにが得意先のポストに空きがあって呼ばれたよ、よくも咄嗟にああいう嘘が出て来たもんね」

元村「・・・」

淳子「ったくああいう時だけはその場で嘘ついて取り繕うのが上手いんだから、この人毎日職安通ってるだけでまだ何の見通しも立ってないの、ダメ男」

元村「ダメ男ってことはないだろ・・・」

淳子「私だってねえ、この先俊弘抱えて不安でいっぱいだよ・・・」

元村「待っててくれよ・・・そのうちきつとどうにかやっつけてる様にするから・・・」

淳子「いいわよもう、アンタの養育費なんか当てにしててもしよすがないんだから、ここんとこお父さんのことが大変でいろいろ考える暇もなかったけど、私は私でこれからちゃんとやっていける様に考えるわよ」

幸太「親父のことはやっと片付いたって訳か」

淳子「そういう言い方しなくたっていいでしょ」

武崎「ねえ、幸太君てさあ、ライブハウスとかでやってんだろ、今度いつやるか教えてくれよ、俺見に行くから」

玲子「私たちも行くよ、ねえお姉ちゃん」

幸太「それがさあ、曲書いてボーカルやってたヤツが就職するとか言い出しやがって、バンドはこないだ解散しちゃったんだよ、だから今はやってねえの」

玲子「また新しい仲間見つけてやればいいじゃない」

幸太「そんな簡単に行くかよ、あのメンバーでプロになるって頑張ってたのに」

玲子「それじゃどうするの」

幸太「分かんねえよ……」

芳子が立ち上がる。

芳子「それじゃ、この際だから私も言っとくけど、私大病院にはもう、戻らないことにしたから」

淳子「どうしてよ？」

芳子「姉さんも見たんでしょ、あのファックス、病院中の噂になっちゃっててね、医局長からも呼び出されて、皆から病院辞めろって言われてる様なもんなのよ」

淳子「なんでよ、だってそれって嘘じゃなかったの？」

芳子「……」

淳子「そんな……でも、芳子がみんな悪い訳じゃないんでしょ」

芳子「まあね……でももう何を言ってもしょうがないのよ、だってまあ……事実と言えば事実だし……」

玲子「そんな芳姉ちゃん、ホントに不倫してたの外科の先生と？」

芳子「最初はね……医師として、尊敬出来る人だったのよ……こんなことになるなんて、思ってもみなかったけど……」

私がバカなの……」

玲子「だけど……」

芳子「……いいのよ、もう人が死んでくを見るのは、お父さんで最後にする」

淳子「医者辞める訳じゃないんでしょ？」

芳子「分かんない、取り敢えずパアーツと外国にでも行って来るかな」

淳子「その後は？」

芳子「さあねえ……皆と同じ」

一同「……」

玲子「はあああ……私たちにはもう、誰も親はいなくなっちゃったんだね……」

淳子「そうね・・・」

玲子「まだ結婚しないのかーとか、仕事はどうなってるんだーとか、うるさく言ってくれる人はいなくなっちゃったんだね・・・父さんはいいなあ、もう何も心配もなくて、安らかにあの世へ逝っちゃったんだから」

新吉郎「まだ死んでないぞ」

白布を取り、新吉郎がムクツと起き上がる。

一同「わああゝっっ！・・・」

驚いて立ち上がる一同。

新吉郎「わっはっはっはっ・・・バカめが、お前たち、何だかみんな大変そうだなあ、ざまあみろ！」

一同「・・・」

新吉郎「でもなみんな・・・頑張れ・・・」

一同「・・・」

新吉郎「ふふふっ・・・人生ってなあいろいろあるから楽しいんじゃないか、ま、俺の様な境地に達するには程遠いがな、はっはははははは・・・」

芳子「お父さん・・・」

新吉郎「俺は、楽しかったぞ、だからお前たちも心配するな、ただな、これだけは言っておく、頑張れなくなった時は、その時はお終いだからな、いいか、それだけは忘れるな」

淳子「うん」

玲子「分かったよ・・・」

芳子「お父さん・・・」

新吉郎「それだけだ。皆、今日は本当にどうもありがとう。それじゃ、今度こそ死ぬからな、いいかお前たち、俺の死に顔をよよく見ておけ」

淳子「父さん・・・」

元村「社長……」
幸太「父さん」
芳子「父さん」
玲子「お父さん……」
武崎「……」

一同が注目する中、新吉郎はこれ以上ないくらい
満面の笑みを浮かべる。
そしてそのまま静かに目を閉じていく。
暗転。

おわり